

玉虫のおばさん

小川未明

青空文庫

ある日、春子さんが、久代さんの家へ遊びにまいりますと、

「ねえ、春子さん、きれいなものを見せてあげましょうか。」と、
 行って、久代さんは、ひきだしのなかから、小さなきりの箱を取り
 出しました。

「この中に、なにが入っているか、あててごらんさい。」と、
 笑いながら、いいました。

春子さんは、なんだろうと思いました。いくら頭をかしげても
 わかりません。

「わからないわ。」

「きれいなものよ。」と、久代さんは、にっこりしました。

「指輪ゆびわでしよう。」と、春子はるこさんは、答えこたました。

「いいえ、そんなものでないの。」

「じゃ、なんでしよう。宝石ほうせき？」

「宝石ほうせきより、もっときれいなものよ。」

「もっときれいなもの……わからないから教おしえてよ。」と、春子はるこ

さんは、まったく、見当けんとうがつきませんでした。

「虫むしよ。」

「まあ、虫むし？ ああ、わかつたわ。ちようでしよう。」

春子はるこさんは、宝石ほうせきより美うつくしいものは、ほかにはない。どうし

ても、ちようであるとしか考かんがえられませんでした。

「いいえ、ちがうのよ。」

「もう、私わたし、わからないわ。早く見はせてよ。」と、春子はるこさんは、
 せがみました。

「玉虫たまむしよ。ほらごらんなさい。」と、その小ちいさな箱はこを久代ひさよさん
 は、春子はるこさんの手てに渡わたしました。春子はるこさんが、受うけ取とってみると、
 それは、美うつくしい、紅べにざらを見るみるように、濃こむらさきい紫むらさきのぴかぴかとした
 羽はねも持もった玉虫たまむしの死骸しがいでありました。

「まあ、玉虫たまむしって、こんなにきれいなもの？」と、はじめで、
 玉虫たまむしを見みた春子はるこさんは、それに見みとれていました。

「ええ、そうよ。黄こがねむし金虫むしだから、たんすに入いれてしままつておおく
 と、縁起えんぎがいいと、お母かあさんがおおつしややつてよ。」と、久代ひさよさん
 がいいました。

春子はるこさんは、そのとき見みせてもらつた、玉虫たまむしの美うつくしさをお家うちへ歸かえつても、忘わすれることができませんでした。

「誠まことさん、玉虫たまむしを見みたことがあつて？」と、春子はるこさんは、弟おとうとの誠まことさんに、ききました。毎まい日にちちようや、とんぼを捕とりに歩あるいていむしるので、虫むしのことなら、あるいは、知しっているかもしれないと思おもわれたからです。

「ああ知しつてるよ。今度こんど捕とまえたら姉ねえさんに持もつてきてあげようか。」と、誠まことさんはいいました。

「どこに、玉虫たまむしはいはるこるの？」と、春子はるこさんは、ききました。

「それは、めつたにみないけれど見みつけたら、持もつてきてあげようね。」と、誠まことさんは、答こたえました。

春子はるこさんは、どんなにそれがたのしみだつたかしれません。そうしたら、久代ひさよさんに、自分じぶんのを見みせてあげようと思おもいました。春子はるこさんは、やさしい性質たぢでありました。誠まことさんが捨すてたとんぼや、せみが、もちで羽はねがきかなくなつて、飛とんでいけずに庭にわの地面じめんに落おちていると、春子はるこさんが見みつけて、すぐに、げたをはいて庭にわへ出でて、それを拾ひろい上げました。

「まあ、かわいそうに、なんて誠まことさんは、乱暴らんぼうなことをするの
でしよう。いま私わたしがもちを取とつてあげてよ。」と、いつて、奥おくか
ら揮発油きはつゆを綿わたにしませてきて、丁寧ていねいに羽はねをふいてやりました。
そして、それを夕空ゆうぞらへ放はなしてやると、とんぼや、せみはさもう
れしように、お礼れいをいって、飛とんでいくように見みえたのでありま

す。

「ああ、いいことをした。」と、これを見て喜ぶ、やさしい春子さんでありました。

おとうさまこと

弟の誠さんは、あいかわらずもちぎおを持つて、学校から帰ると近くの松の木のある丘へ遊びにゆきました。早くも秋がきて、そこには、いろいろの草や花が咲きました。そして、ひところのよように、せみの声はしなくなつたけれど、やんまや、かぶと虫がいたからであります。

まつ

松にまじつて生えている雑木をたずねて歩いていると、一本のかしわの木があつて、そこにかぶと虫の止まつている黒い脊中が見られました。

「あ、いる。」と、誠まことさんは、その木きの下したに立たつて見み上げました。そこには、かぶと虫むしのほかにも、さいかちがいたし、また大おおきなありが動うごいていたし、しかもすこしはなれたところに、姉ねえさんの欲ほしがついていた玉たま虫むしがとまつていて、それらを護ご衛えいするように、すずめばちが、怖おそろしい目めをして、あたりをきよろきよろながめていたのです。年とし老としつて、腰こしの曲まがつたかしわの木きは、これらの虫むしたちに皮かわを傷きずつけられて、甘あまい液えきを吸すわれているのを苦く痛つうに感かんずるのでありましようが、どうすることもできずにいました。誠まことさんは、棒ぼうでかぶと虫むしと玉たま虫むしを下したへ落おとすと、あわてて口くち笛ぶえを吹ふきながら、体からだをすくめて、飛とんできたはちの攻こう撃げきを避さけようとしました。やがて、はちはまた木きへもどりしました。そこで、

「まこと誠さんは、二匹の虫を拾うと大急ぎで家へ帰ってきました。」

「ねえ姉さん、玉虫を捕まえてきたよ。僕、揮発油をつけて、殺してやろうか？」と、まこと誠さんは、いいました。これをきくと、春子さんは、

「待つていらっしやい。」と、いつて、急いで、出てきました。

「きれいな虫なのね、久代さんところで見たのより、よっぽど美しいわ。」

「それは、こつちが生きているからだよ。」と、まこと誠さんが、いいました。

「そうかしらん、殺すのはかわいそうね。」

「僕、殺してあげようか。」

「生かして、飼つておかない？」

「ああ、そうしようか。はちみつをやるといいのだよ。砂糖でも

いいかもしれない。」誠さんは、石罅の入っていた、ボール箱

に穴を明けて、その中へかぶと虫と玉虫を入れておきました。

誠さんの留守に、春子さんは、一人でかぶと虫と玉虫とが、箱

の中でもだえているのをながめていましたが、誠さんが帰ると無

理にすすめて、二匹の虫を原っぱへ逃がしてやりました。

ある晩のことです。春子さんは不思議な夢を見ました。夏から

秋にかけて、林や、花園にきて遊んでいたちようや、はちや、

蛾や、とんぼや、せみが、だんだん寒くなるので、船に乗って暖

かな南の国へ旅立つのであります。その中にもいちばん目立って

うつく
美しいのは玉虫たまむしのおばさんでありました。紫むらさきいろ色の羽織はおりをき

たおばさんは、船ふねに乘ろうとして、

「また、来らい年ねんまいります。」と、見送みおくりにいった春子はるこさんに、

にこやかに、お別わかれのあいさつをしていました。すると、いつか、

もちをふいて逃にがしてやった茶色ちやいろのどんぼが、また玉虫たまむしのお

ばさんの蔭かげから、恥はずかしそうにして春子はるこさんにあいさつをして

いたのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店

1936（昭和11）年12月

初出：「せうがく三年生」

1936（昭和11）年11月

※表題は底本では、「玉虫《たまむし》のおばさん」となっています。

※初出時の表題は「玉虫の小母さん」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

玉虫のおばさん

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>